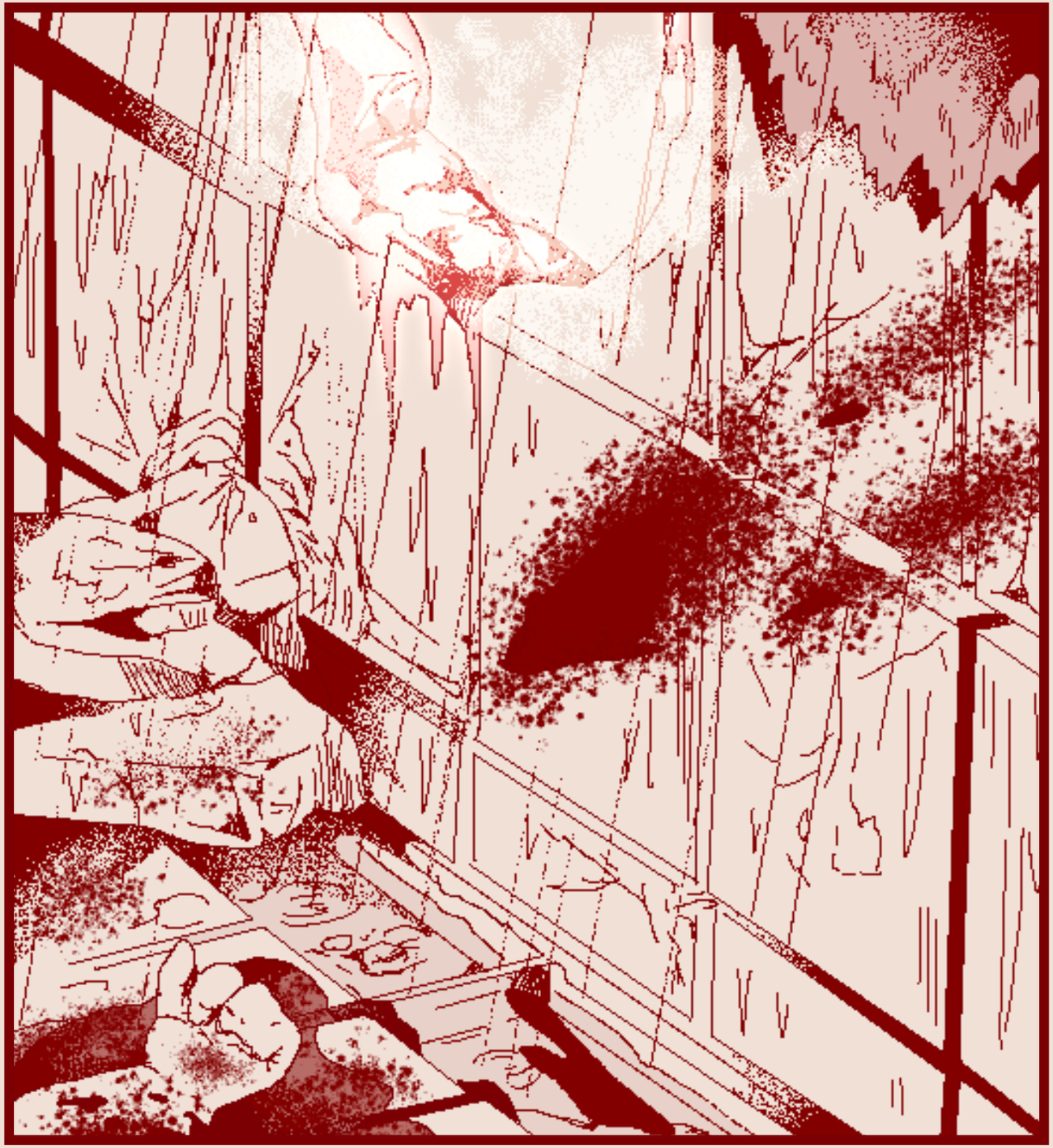


1

深紅のデータ生命体へと変貌を遂げたカオスドラモンの全身から、無数の破壊光線が嵐のように乱射されていた。

東京都庁第一本庁舎の吹き抜けを支えていた太いコンクリート柱が次々と蒸発し、耐荷重を失った上層階の床スラブが、滝のように降り注ぐ氷雨と一緒に轟音を立てて崩れ落ちてくる。

瓦礫の傍らには勇太が殺した子供の血と肉、そして命が瓦礫と同じように転がっていた。

その灼熱と崩壊の渦中で、勇太の小さな身体はなおも動き続けていた。

慎平を庇って撃ち抜かれた右胸には、向こう側の瓦礫が透けて見えるほど大きな風穴が穿たれている。左手で握りしめていた D-3 はすでに木っ端微塵に砕け散り、本来ならとうに事切れて冷たくなっているはずの肉体だった。

しかし、限界を超えて引き出されたフェアリモンの風のスピリットが、制御の枠を食い破って勇太の生身の肉体へと直接溢れ出していた。両頬から首筋、そして四肢の皮膚の表面には、まるで冷たい電子基板の回路のような青白い光の線が幾筋も走り、損傷した右胸の肉や砕けた骨をデータの粒子で強引に縫い合わせ、端から治癒させていく。

だが、肉体の欠損がデータとして塞がれても、胸を焼かれた瞬間の激痛も、右上腕に刺さった鉄筋の疼きも、何一つ消えてはいなかった。

再生と破壊が同じ場所で同時に進行するような生き地獄の痛みが、一秒ごとに勇太の神経をヤスリで削り取っていく。

「…ッ、なんなんだよ、あのクソガキは!! 心臓の横をぶち抜かれてんのに、なんでまだ立ってやがる!? 撃て、カオスドラモン！ 肉片ひとつ残さず焼き尽くせェッ!!」

カオスドラモンの肩部装甲の上で、渡辺 直人が焼けただれた右頬を醜く引き攣らせ、苛立ちと恐怖の入り混じった怒声を張り上げた。

直人の号令を受け、カオスドラモンの背面にそびえる超巨大砲塔と全身の砲門が再び勇太の一点へと照準を合わせる。

勇太は血の泡を吐き出しながら、濡れた瓦礫の床を蹴って渡辺とカオスドラモンへ向かって真っ直ぐに駆け出した。

その顔は激しい怒りに歪んでいたが、見開かれた瞳の奥底には、自分の手で幼い子供たちを切り裂いてしまったことへの底なしの恐怖と、自分が何者になってしまったのかすら分からない激しい混乱が自覚の出来ない渦巻いていた。

カオスドラモンの砲口が臨界の紅い光を放ち、直人が「くたばれェッ!!」と絶叫して極大のレーザーを撃ち放つ。

空間そのものを融解させる光の奔流が、踏み込んだ勇太の鼻先へと迫った…まさにその刹那だった。

鼓膜を突き破るようだった砲撃の轟音も、崩れ落ちる鉄骨の悲鳴も、地面を叩く雨音さえも、すべての音がまるで深い水底へ沈んだかのように一瞬で掻き消えた。

放たれた赤いレーザーの光の粒がすぐ目の前で凍りついたように静止し、周囲の時間が完全に止まったかのような錯覚の中、勇太の意識だけがその白熱する攻撃のただ中へと取り残されていた。



2

　耳を劈くはずだった超高温レーザーの轟音も、崩落する都庁ロビーの粉塵も、硝煙と血の入り混じった鉄錆の臭いも、すべてが唐突に消え失せていた。
　視線を落とせば、その白く澄んだ空間のあちこちに、砕け散った D-3 の破片が重力から解き放たれたように頼りなく漂っていた。
　黒く焦げた樹脂の欠片、割れた液晶、断ち切られた内部回路――二度と元には戻らないその残骸の断面には、かつて自分の脚を包み込んでいたあの風を思わせる、淡い翡翠色の光が微かに脈打つように残っている。
　風の音しかしないはずの空間の奥底から、ふいに、湿ったノイズのような音が滲み出した。
[…たす、けて。]
「…いたい。」
　誰の声なのか、輪郭を結ばない幼い声の断片が、白い風に混じって勇太の鼓膜を撫でた。勇太の肩が激しく跳ねる。
「…こわいよ。」

「――ころ、して。」

　両手で耳を塞ごうとしても無駄だった。
　それは外から響く音ではなく、勇太自身の脳髄の裏側、あるいは引き裂かれた胸の奥から直接湧き上がってくる残響だったからだ。
　勇太は奥歯が砕けそうなほど強く歯を食いしばった。噛み締めた歯茎からぷつりと生温かい血が滲み、舌の上に鉄の味が広がる。
　聞きたくない、と念じれば念じるほど。頭を振ってその声を掻き消そうとすればするほど、声は幾重にも重なり合い、逃げ場のない白い空間の四方八方から反響して膨れ上がっていく。
　瞼の裏に、消しようのない感触が何度も、何度も繰り返し蘇る。
　生温かい人間の鮮血が自分の頬へ跳ねた、あの取り返しのつかない感触。
　自分の足首に絡みつき、行かせまいと縋りついてきた小さな首筋を、震える手で掴み上げた時の、幼く脆い骨の細さ。
　そして…慎平たちの頭上にムゲンドラモンの顎が迫ったあの極限の一秒で、自分が叫び声とともに全方位へ解き放った、無数の真空の刃。
　肉を断ち、骨を割り、悲鳴すら終わらせる前に十数体の小さな命をまとめて切り刻んだ、自分自身の力の重み。
「…殺した」
　血の滲む唇から、掠れた声が零れ落ちた。
誰に強制されたわけでもない…他の誰のせいにもできない。
　仲間を助けるためだと　いう理由があったとしても、あの子たちの命を天秤にかけ、切り捨てることを選んだ…デジモンを殺した時と比べものにもならない重圧を感じている自分自身にもじわじわと自分の心を蝕みはじめてもいた。
　その事実を、勇太は自分自身に刃を突き立てるように呟いた。
　脳裏には、焼けただれた顔で笑う渡辺直人の悍ましい声が渦巻いている。母や妹を穢したのだと嘲笑ったあの男の言葉が本当なのかどうかすら分からないまま、それでも TEZ の礼拝堂で見たリングに縛られた家族の虚ろな瞳と、光や秋子の人生を踏みにじり、何の罪もない子供たちをデジモンとつぎはぎにして使い潰した男の所業と、そして自分の手が犯したばかりの消えない罪とが、勇太の中でどす黒い一つの塊となって煮え滾っていた。
「…だから、せめて…あいつを、殺さないと…。」
　震える拳を握り締め、勇太はうわ言のように続けた。
　あいつを生かしておけば、あの子たちを殺した自分の罪までが、何の意味もないただの虐殺になってしまう…何かしなくては、その焦りが勇太に渦巻くどす黒い感情と最悪の噛み合い方をしていた。
　渡辺をこの手で殺し尽くさなければ、あの子たちに、家族に、傷ついた仲間たちに顔向けができない…そんな歪んだ結びつきに縋りつくことでしか、今の勇太は自分の立っている足場を支えることができなかった。



3

吹き荒れる白い風の向こう側で、ふわり、と淡い緑色の燐光が揺らいだ。
無数の光の粒が風に寄せ集められるようにして、そこに一つの輪郭を結び始める。
細くしなやかな四肢と、背中に広がる蝶にも似た優美な翅のシルエットを持った、一体の女性型デジモンの姿だった。
砕け散った D-3 と勇太の肉体を繋ぎ止めていたスピリットの残滓を介して、勇太の深層意識へと接続した、その力本来の持ち主の意識そのものだった。
彼女は白い風の中に静かに降り立ち、うつむいて肩を震わせる勇太の前に立った。薄桃色の髪を風に揺らし、仮面の下の瞳でまっすぐに勇太を見つめている。
だが、罪悪感と殺意の濁流に呑み込まれていた勇太は、目の前に現れたその人影が誰なのか、すぐには理解できなかった。ただ呆然と、血走った目でその輪郭を見上げる。
その爪先が透明な床に触れた瞬間…勇太の両脚の奥に残っていた風の気配が、まるで懐かしい主の呼び声に応えるかのように、微かな熱と共鳴を伴って震えた。
勇太の瞳が、ゆっくりと瞠られる。
視線が、彼女のすらりとした脚へと落ちた。自分が何度も戦場を駆け抜け、高く跳び、仲間のもとへ走るために風を纏わせてくれた、あの装甲と同じ曲線がそこにあった。
ヴォーボモンが隣にいない現実世界の戦場でさえ、ただ生身の人間でしかなかった自分が、戦うことを可能にしてくれた、かけがえのない風の力。
「…今まで、俺に力を貸してくれたんだよね…。」
「…なんで今？」
勇太は彼女の足元からゆっくりと視線を上げ、乾いた唇を動かした。どれほど心がささくれ立っていても、彼女に対する感謝だけは嘘偽りのない本心だった。
「…今言っておかないといけないと思ったんだ…だから、ありがとう。
…今まで、誰かを守る力を、俺に預けてくれたから」
その言葉を受け止めたフェアリモンの唇が、わずかに震えた。
彼女は誇らしげに微笑むことも、礼を受け取ることもせず、ただ痛ましそうに眉を寄せ…消え入りそうなほど柔らかな声で、短く言った。
「ごめんね…。」
「…。」
「なんで…あんたが謝るんだよ…。なんでそんな事言うんだよ…。」
フェアリモンは静かに首を横に振った。白い風の中で、彼女の翅が淡い緑の粒子を散らしながら揺れる。
勇太にフェアリモンが何に対して謝罪したのかは分からなかった。
しかし、その謝罪が今の自分自身が何か決定的な部分で落伍したと告げられているように感じずにはいられなかった。
「そうじゃない…そうじゃないんだ勇太。
ボクは…ただ…なんでだろうボクも今…君に謝らなきゃいけない気がしたんだ。
君が思っているような、綺麗な理由で力を貸したわけじゃない事を。」
彼女は自分の胸元にそっと手を当て、苦い記憶を噛み締めるように目を伏せた。
「なに…が？」
「あの日、不完全なスピリットが砕けた時、ボクの意識と力の一部が君の中に残ったのは…君の魂の波長が、誰よりもボクと相性が良かったから。
でも、ボクがそのまま君の脚に留まり続けたのは、ただの偶然じゃないの」
フェアリモンは顔を上げ、仮面の下の瞳で勇太をまっすぐに射抜いた。自らを善人として繕うことのない、静かで残酷なほど誠実な響きがその声にはあった。
「ボクはデーモンを殺したかった。
君は否定するだろうけど…君の力を借りて、死んでいった仲間の復讐に…ボク自身の復讐に、君を巻き込んだんだ。」
「…」
「ただ…それだけじゃなかった。…君やヴォーボモン、光ちゃん…君達が必死に誰かのために傷つくのを一番近くで見てきて…途中からは、純粋に君たちを守りたい、君たちに生きていてほしいと願うようになったんだ…今もその気持ちに嘘はない。」
白い風が二人の間を吹き抜ける。



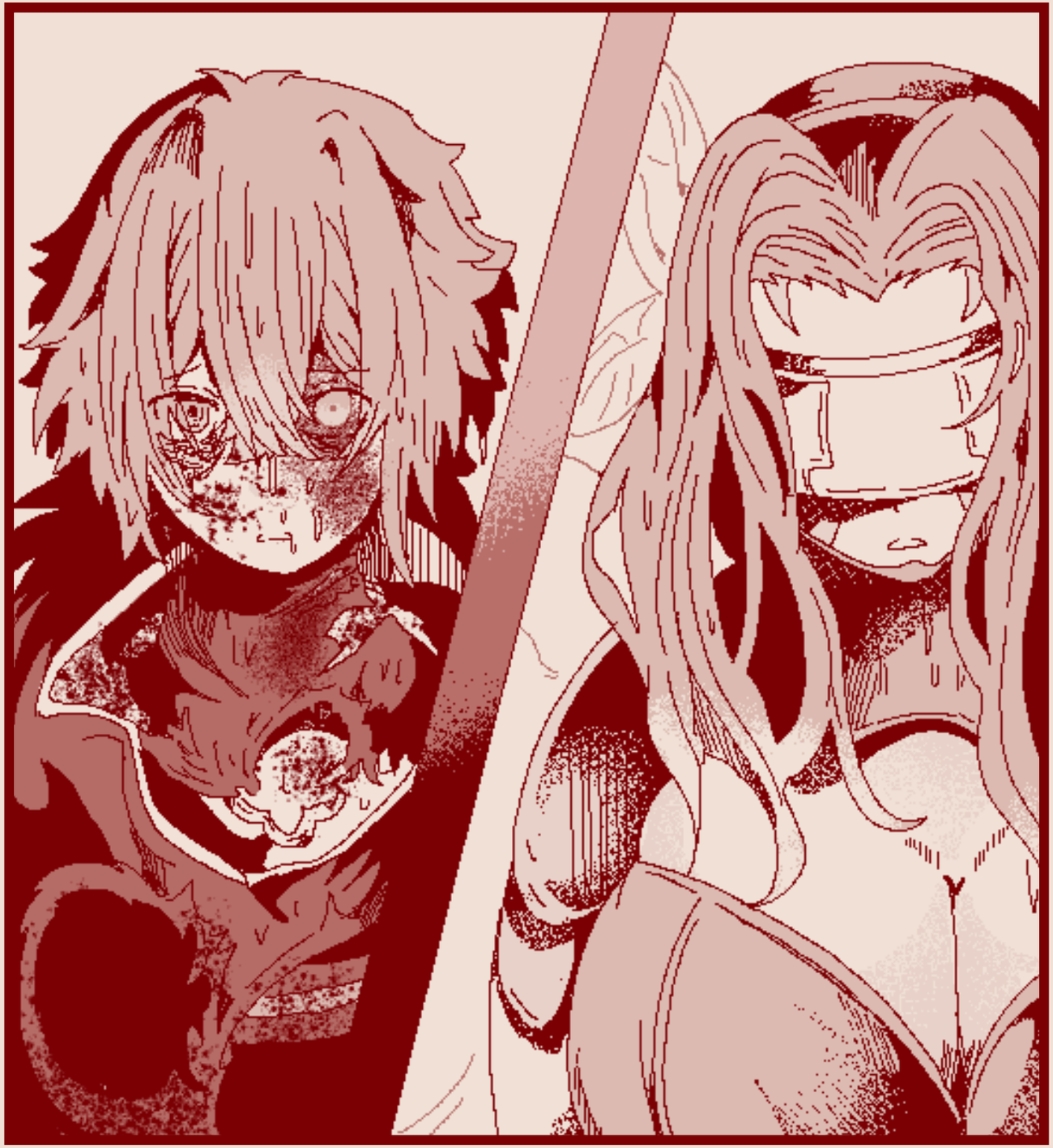
4

　勇太の拳に、再びぎしりと力がこもった。フェアリモンが何を言いたいのか察した。
　勇太の胸の奥から苛立ちにも似た感情が噴き上がる。
「…だったら、なんだよ。巻き込んだから俺は悪くないって言いたいのか!?
　…まさか巻き込まれた君は今更手を汚すなって言いたいのか!?ふざけんな!!!!」
「…。」
　自身の今の心境を整理できずにいたが勇太はその心が起こそうとしている事は理解していた。
　吠えるように問い詰めた勇太に対し、フェアリモンは一歩も退かなかった。
　彼女は勇太の怒りを否定しなかった。清廉な聖人の上から目線で復讐の愚かさを説くようなことは、決してしなかった。
「君が今…復讐を望んいる事は間違いだったとは、ボクは言わない。」
　凛とした声が、白い空間に澄み渡る。
「ボクは、それで満足できた…奪われた仲間たちの無念に決着をつけることであり、ボク自身が過去にケジメをつける…それだけで良かった。
　こんな状態で先なんてないと分かっていても、終わりへ進むためにどうしても必要なことだったから。…だからボクは、復讐そのものを悪だなんて否定しない。」
「だったら!!!!分かるだろ!!!！あいつを殺さなきゃ!!!！…俺は!!!」
「でもね、勇太」
　フェアリモンは静かに遮った。
「君は、どうなの？」
「あいつは…渡辺は、光の過去をめちゃくちゃにして、俺の家族や仲間を傷つけた！それだけじゃない、何の罪もない子供を…!!!
　っ俺なんかどうでもいい!!!！だから…!!だから!!!あいつは殺さなきゃ…あいつは殺…!!!!!」
　「殺されて当然だ」と言い切ることが、どうしてもできなかった。自分の口から出た言葉が、先ほど都庁のロビーで「お前も俺と同じだ」と嘲笑った自分自身だけが基準とした渡辺の論理と、酷く似た響きを持っていることに気づいてしまったからだ。
　揺らぐ勇太を見つめ、フェアリモンは静かに、だが逃げ場のない問いを投げかけた。
「勇太。君はあの男を殺して何かをなかった事にしようとしていないかい？」
「…っ」
　勇太は唇を戦慄かせたまま、答えることができなかった。
　あの男を八つ裂きにしたところで、リングに心を掻き乱された母や妹の傷がなかったことになるわけではない。
　自分の放ったかまいたちで切り裂かれ、冷たい床に血を流して動かなくなったあの実験体の子供たちが、生き返るわけでもない。
　何より、他の誰でもない日野 勇太自身が「仲間を助けるためにあの子たちを殺す」と選んだあの瞬間の行動を、永遠に消し去ることなどできはしない。
　頭では分かっている。分かっていても、胸の奥で荒れ狂う黒い炎が、勇太の喉を焼き焦がす。
「…わかんねえよ!!!じゃあ俺の腹の底から頭に上ってくるこの焼き尽くされそうな熱をどうすればいいんだよ…!!!あいつを…あいつを生かしておくことなんか、俺には耐えられねえよ…!!!!」
　絞り出すように叫びながら、勇太は自分の頭を掻きむしった。



5

なぜ、これほどまでに自分は渡辺を殺すことに取り憑かれているのか…勇太は自分でも直視したくなかった心の底の澱を、一つずつ言葉として吐き出さずにはいられなくなっていた。
「あいつが憎いだけじゃない…俺は、現実に帰ってきてからも、結局家族を守れなかった。
母さんや日花があんな目に遭う前に、俺がもっと早く…ずっと信じてた…力さえあれば…!!正しい道を進めばな…進め…ば…でも…クソ…どうしたらよかったんだよ!!
日花が何したってんだよ!?あいつはまだ小2だぞ!!!…何も知らないのに何もしてないのに…!!
教えてくれよ!!!俺は何をすればよかったんだ!?何が足りなかったのか!?…なぁ!!!死んでもいい!!それで報いれるなら!!!そうじゃないなら…ないなら…。
あの場所で…俺は、自分の手で、あの子たちを…俺が信じてたものは…ただ…ただ…人を苦しめただけの…だってのかよ。」
ぽろぽろと、涙が嗚咽と共に勇太から溢れた。
肩を震わせ、嗚咽混じりに言葉を継ぐうちに、勇太は自分がなぜこれほど必死に渡辺の死という一点へ縋りついているのか、その本当の理由に気づき始めていた。
自分の手が血に汚れた。自分の選択が誰かを傷つけた。因果も理由もない。
もしここで立ち止まってしまえば、これから先、その重すぎる責任を背負ってどう生きていけばいいのか、次に何を選べばいいのか、自分の頭で考え続けなければならなくなる。
渡辺を殺すための犠牲と物語…それを必死に辻褄を合わせて手繰り寄せようとしていた。
勇太が見た左手にはべっとりと血がこびりついていた。
そして、誰かが縋ってくるように引きずり込むようにもがく様に左手を弄る。
その奥には、幾つもの目が勇太を見つめていた。
「…っ、渡辺を、俺の手で殺して終わらせれば…俺が間違っていたのかどうか、もう考えなくて済むから…か。」
勇太の声は、自分自身の卑怯さに震えていた。
「…あの子たちを殺してでも進んだ俺の選択が、全部正しかったことにできるってか…はは…なんだよ…それ、ここにきて俺はまた自分の事かよ…。」
すべてを吐き出し、膝から崩れ落ちそうになる勇太を、フェアリモンは責めなかった。その弱さも、醜い自己保身も、すべて人間の少年が抱える痛みとしてそのまま受け止めるように、彼女は静かに頷いた。
「たとえ今…このまま渡辺を殺して復讐を遂げたとしても、君は決して満たされない。
だって、君が一番憎んでいて、一番許せないと思っているのは、あの男以上に自分自身なんだから。」
勇太はただ俯き続けた。
「その消えない罪の意識から目を逸らすために渡辺を殺しても、苦しみは消えない。自分が正しかったと証明するために、君はこれからもずっと、殺していいと勝手に決めつけた敵を…新しい復讐を探し続けることになるわ。
…そうやって自分の罪を誰かの死で塗り潰し続けた先にあるのは…デーモンとも…あの男とも同じ本当の化物。」
「…。」
「怒りを否定する必要なんてないわ」
フェアリモンはきっぱりと告げた。
「恨んでもいい。憎んでもいい。あの子たちのために誰も怒らないなんてそれこそ残酷だよ。
…多分君が今あの子達の事を思っている。
でも、今、勇太に必要なのは、その怒りを消すことじゃない。その怒りと抱えたままで、君が何を選ぶかだよ。」



6

「…。」
　勇太はその言葉の意味を頭で理解したが心は納得できなかった。
　言葉を出そうにも感情を飲み込み切れなかった。
　白い風が、少しだけその勢いを和らげた。
　フェアリモンは、涙と血で顔を汚したまま立ち尽くす勇太を見つめ、ふっと静かに息を吐いた。そして、彼に一つの選択肢を差し出すように、穏やかな声で言った。
「ねえ、勇太。もし君がここで立ち止まりたいなら…一つだけ、別の道もあるわ。」
　彼女は、足元に浮かぶ D-3 の破片…そこに宿る緑色の燐光へと視線を落とした。
「今までの話を…正直子供の君に飲み込めなんて残酷でしかない。
　飲み込む必要なんてどこにもない…本当に悪いのは君をここまで追い込むまで何もしてあげられなかったボク達なんだから。
　ねえ…勇太。
　今の君の身体には、限界まで引き出されたボクのスピリットの力が巡っている。
　君自身の生体データと、ボクの中に残っている力をすべて使えば……今なら、ボク自身をもう一度実体を持たせて世界へ完全にリアライズさせることができるかもしれない。」
　勇太の目が、わずかに見開かれ顔を上げた。
「ボクが実体化して、君の代わりに戦う。
　このままゲートを越えて、デジタルワールドで戦っている光ちゃん達のもとへ、ボクが守りに行くこともできる。」
　その言葉を聞いた瞬間…勇太の胸の奥に、ふっと拍子抜けするような、甘美なほどの安堵がよぎった。
　もう、戦わなくていい。
　フェアリモンが実体化して、自分の代わりに光を守りに行ってくれるなら…。
　何より、自分がこれ以上この汚れた手で誰かを傷つけ、取り返しのつかない選択を重ねてしまう恐怖から、今すぐ逃げ出すことができるのだ。
　…だけど。
　一瞬だけ緩みかけた勇太の表情が、すぐに重く、苦しげに曇った。
　胸の奥底で、どうしても頷くことを拒む熱い塊がざわめいている。
　フェアリモンにすべてを預けて安全圏へ退くことを想像した途端、吐き気がするほどの忌避感が喉元までせり上がってきたのだ。
　それは、あの子たちを殺した罪悪感から目を逸らして逃げ出すことへの、本能的なまでの嫌悪だった。
　そして同時に、光や家族や実験体の子供たちを踏みにじった渡辺という男との因縁だけは、他の誰でもない、この自分自身の手で決着をつけなければならないという、理屈を超えた渇望が勇太の足を縫い止めていた。
　自分が動くべき理由がまだ言葉にならないまま、それでもここから逃げてはいけない…逃げる事は自分の人生そのものから逃げるという感覚を勇太はどうしても否定することができなかった。



7

　唇を噛み締め、答えを出せずに俯く勇太の様子を見て、フェアリモンはすべてを察して締め付けられたような面持ちで答えた。
「…やっぱり、そういう顔をするんだね。」
　彼女は一歩脇へと身を引き、自分の背後…果てしなく広がる白い風の向こう側へと、そっと手のひらを向けた。
「なら、この子と話してみる？」
　フェアリモンが促すのと同時だった。
　白い風の帳の奥から、トタトタ、とどこか聞き覚えのある、愛嬌のある足音が響いてきた。
　吹き荒れる白い粒子を掻き分け、そこに浮かび上がったのは、固く赤い鱗と、頭頂部から揺らめく小さな炎の角を持った、小型の火竜の輪郭。
　現実世界のゲートを出た勇太を探していたヴォーボモンは、フェアリモンの風がD-3の残存回路から伸ばした通信の糸を辿り、引き裂かれた世界の距離を越えて、まず意識を勇太の心象風景へと飛び込ませた。
「勇太っ」
　弾けるような声が、白い空間に響き渡った。
「…ヴォーボモン…っ!?」
　勇太は息を呑み、信じられないものを見るように目を見開いた。
　あのオグドモンの崩壊の中で自分がデータの粒となって消えてから、ずっと離ればなれになっていた相棒。
　東京で目を覚ましてからも、片時も忘れたことのなかった小さな背中が、傷つきながらも確かにそこにあった。
　生きていた。無事でいてくれた。
　胸を締めつけるほどの安堵が込み上げ、勇太は思わず一歩前へ踏み出そうとした。
　だが…その足が、透明な床の上でぴたりと止まった。
　自分の足元に漂うD-3の残骸と、自分の両手にこびりついた消えない血の幻影が、勇太の視界を焼き焦がしたからだ。
　安堵のすぐ後から、鉛のように重く冷たい罪悪感が、津波のように勇太の心を呑み込んでいく。
「来るな…っ！」
　駆け寄ろうとしたヴォーボモンに向かって、勇太は悲鳴のような声で叫んでいた。
「…だめだ…。」
勇太は必死に首を振り、自分の身体を隠すように後ずさった。
「もう…俺は…。」
　拒絶の言葉を叩きつけられても、ヴォーボモンは立ち止まらなかった。
その丸い瞳には、勇太の言葉に対する戸惑いこそあれ、戦うこと自体への迷いや怯えは、微塵も浮かんでいなかった。

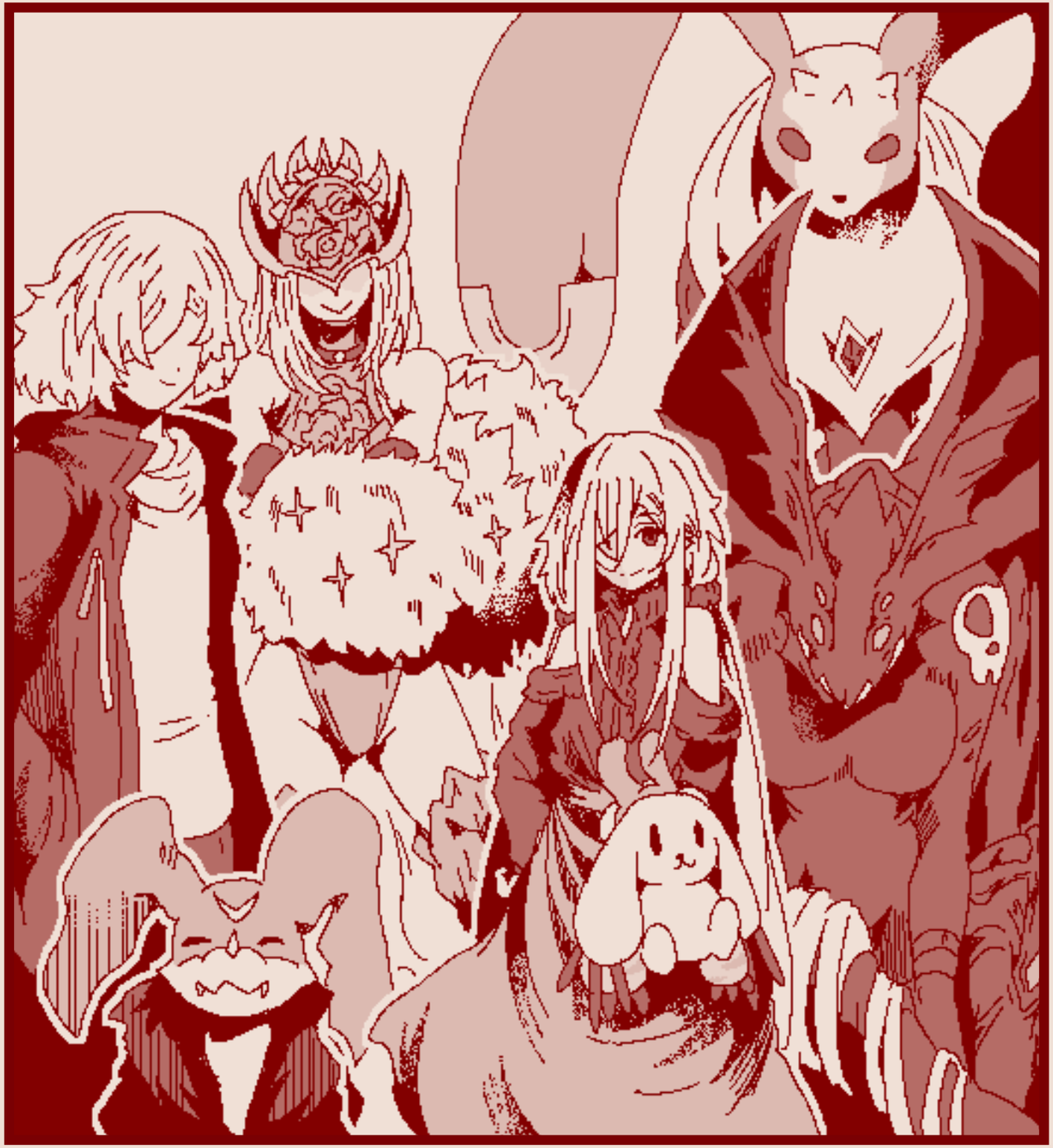


「どうしてそんなこと言うの…勇太？」
　一歩ずつ距離を詰めてくるヴォーボモンから目を逸らし、勇太は自分の両手を胸の前で強く握り締めた。
「違うんだ…俺は…。」
　勇太の声は、自らを呪うように震えていた。
　何かを告げるようにヴォーボモンに合わせるように屈み痛々しく勇太は笑った。
「俺は…もうお前の隣にいるには…醜い心でいっぱいで…自分で自分を、止めることすらできな…い…。」
　過去の記憶が、鋭いガラスの破片となって胸の奥を抉る。
　思えば、自分がこういう人間だということは、ずっと前から分かっていたはずだった。
　かつてテリアモンの村でベルスターモンへの殺意に呑まれ、ヴォーボモンをゲヘナガリータモンへと暗黒進化させて光まで殺しかけた時。
　そして、ルクスモンと強制融合してハシュマモンとなり、自分の内側から止めることもできないまま、数え切れないほどの味方やデジモンの命を焼き払ってしまった、あの時。
　あの時に、自分は英雄になどなれない、力を持てば周囲を破滅させるだけの化け物なのだと、気づくべきだった。
「もう…俺は、俺自身を許すことができない…。こんなどす黒い心のままでお前と一緒に戦ったら、お前まで…。
　だから…ごめん…その…俺は…どうしてやったらいいか…分からない…でも俺の傍にいちゃ…だめだ。」
　涙を零しながら訴える勇太の前で、ヴォーボモンは静かに足を止めた。
　そして、砕けたD-3の破片を見つめながら、ぽつりと言った。
「…もう、伝わってきたよ。」
「え……？」
「ここに来る途中、フェアリモンの風と一緒に、壊れたデジヴァイスから全部流れてきたんだ。
　勇太の心も、苦しさも、さっき勇太が見た記憶も…全部、僕の中に伝わってきたよ。」



9

　その瞬間だった。
　ヴォーボモンが短い脚で地面を強く蹴り、砲弾のように跳躍した。
　小さな、けれど岩のように硬い拳が、真正面から勇太の左頬へと重く叩き込まれる。
　鈍い音が白い空間に響き、勇太の身体が横向きに吹き飛んで地面へ尻もちをついた。
　殴られた頬の熱と衝撃に、勇太は痛みすら忘れて呆気にとられ、目を丸くしてヴォーボモンを見上げた。
「…へ？」
「ふざけるなよ、勇太…っ！」
　ヴォーボモンは肩を荒く上下させ、小さな拳を握り締めて仁王立ちしていた。
　いつも甘えん坊で泣き虫だったはずの火竜の瞳が、光を帯びて勇太を睨み据えていた。
「デジタルワールドじゃ、戦わなきゃ仲間も、大切な居場所も全部失うことがあるんだ…！
　僕達は、勇太に会う前からこれまでも生きるために戦って、いくつも命を奪ってきた！」
ヴォーボモンの声が、勇太の胸の奥まで真っ直ぐに突き刺さる。
「だけど、勇太も僕も、自分の楽しみのために誰かの命を奪ったことなんて、ただの一度だってない！そうだろ!?」
「でも…。」
「…僕たちにできたのは、せめて目の前にある守りたい命を必死で守って…そして、自分たちが奪ってしまった命と、守れなかった命を、絶対に忘れないことだけだ。」
勇太は何も言い返せず、殴られた頬を押さえたまま唇を震わせた。
「僕は、最初からその覚悟をして、戦うためにこの現実世界へ来た！」
　強く言い切ったあと、ヴォーボモンはふっと視線を落とし、胸の奥の痛みを堪えるように、少しだけ申し訳なさそうに声を震わせた。
「…ごめん、勇太。
　その…ここまで言っといて…僕がここまで来られたのは、僕一人の力じゃないんだ。
　ゲートの前で……叶が、命懸けで相手を抑え込んで、僕を現実世界へ通すチャンスをくれたんだ…」
「叶が…。」
　息を呑む勇太に、ヴォーボモンは涙を堪えた目で真っ直ぐに向き直った。
「…みんなが命を懸けて繋いでくれたんだ。
　それなのに、今ここで勇太が自分から逃げて、一人で勝手に戦ってこんなんじゃ…それこそ、命を懸けてくれた人たちに本当の冒涜になる！」
　ヴォーボモンは一歩踏み出し、震える声で、けれど決して目を逸らさずに言った。
「こんなこと言ったら、勇太に恨まれるかもしれない。…だけど僕は、叶が命懸けでくれたこのチャンスを、絶対に無駄にしたくない！」
　白い風が二人の間を吹き抜ける。ヴォーボモンは、傷ついた勇太の瞳の奥を覗き込むように問いかけた。
「守れなかった、殺してしまった命を勝手に語るのは、傲慢な事だけど…それでも…それでも勇太が奪った命に何かしてあげたいなら走り続けなきゃ！せめて答えが出るその時まで！」

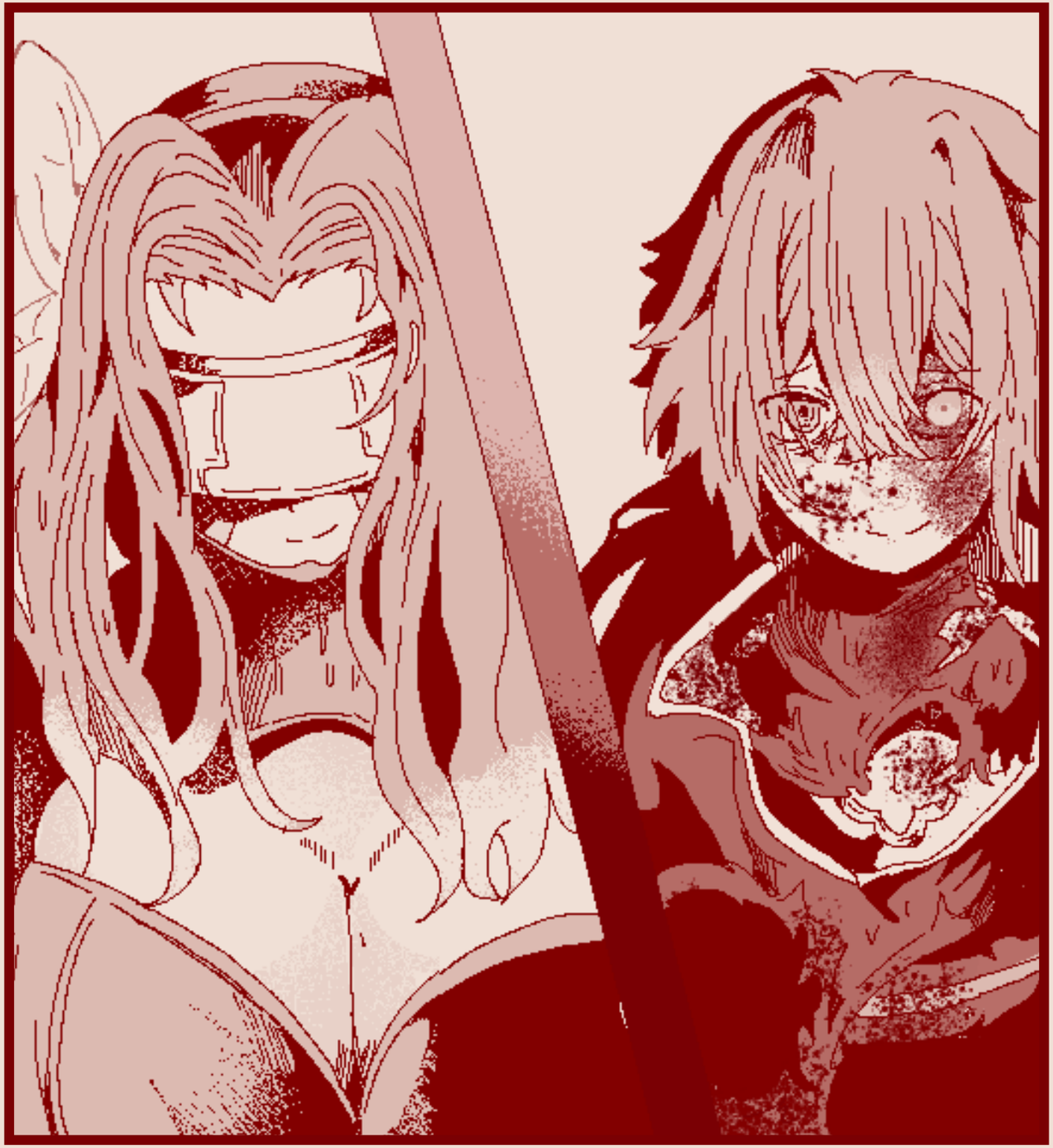


　ヴォーボモンの問いかけに、勇太は床に手をついたまま、激しく呼吸を乱した。
ヴォーボモンはゆっくりと勇太のそばへ歩み寄り、その視線の高さに合わせるように身を屈めた。
「それに…アンティラモンもサンドリモンもデビドラモンも…なにより光が待ってる。」
「光…。」
　光の名前で、勇太の頭を覆っていたどす黒い霧が、少しずつ晴れていく。
「…。」
　しかし、すぐにその心に靄がかかり表情が曇っていった。
「でも…俺は…俺みたいな奴が…。」
「まだ、そんなこと言ってるの!?勇太！勇太がどう思っても光には。
　…光にとっては勇太しかいないんだよ!!!！
　…いつもそうやって、相手の事を聞かないまま…また、一人で勝手に僕を遠ざけようとして!!!」
　その指摘に、勇太の心臓が強く脈打った。
「後ろめたいかもしれない…けど、それでも勇太は…会いたくないの？皆んなに光に。
　きっと…それが。」
　他者の意思を奪い、自分の都合のいい物語の駒として命を消費する。
　その傲慢さこそが、勇太が心の底から憎み、拒絶したものだった。
　自分が今ヴォーボモンにやろうとしていたことも、裏を返せば相手の意思を無視する同じ過ちの入り口だった。
　そして、その怒りの奥底から、ずっと押し殺していたもう一つの本音が、堰を切ったように溢れ出した。
勇太の目から、大粒の涙がぽろぽろと零れ落ちる。
「俺なんかが、もうそんなこと願う権利なんてないのは分かってるけど…っ！」
　勇太は子供のように顔を歪め、声を上げて泣きながら叫んだ。
「それでも、あいつが許せないのと、おんなじくらい…光に会いたい…！ デビドラモンや、みんなに、もう一度会いたい…っ！」



11

　涙でぐしゃぐしゃになった顔のまま本心を吐き出した勇太の前で、ヴォーボモンは力強く頷き、勇太の左手を取った。
　そこには、溢れる血だけじゃなかった、泥も傷もある。
　だが、薄汚れただけではない誰かを守ろうとした手であった。
　勇太の弱さも、エゴも、消えない罪もすべて聞いた上で、小さな火竜は誰に強いられることもなく、自分の足で勇太の隣へと並んだ。
「僕だって…また皆といたい。だから僕は、僕の意思で勇太の隣にいるよ。」
　これから踏み込む戦場がどれほど過酷で、そこでは誰かを守るために再び誰かの命を奪う選択を迫られるかもしれないこと…その血の重みさえも、勇太一人に押しつけるのではなく、自分自身の責任として引き受ける覚悟が宿っていた。
　ヴォーボモンは自分の小さな爪先を勇太の膝にそっと触れさせ、優しく、けれど揺るぎない声で続けた。
「勇太が背負ってしまった罪悪感にどう向き合うのか、これからどうやって償っていくのか…そんなの、今ここで無理に答えを出さなくていいよ。
　きっと…そんな簡単に答えを出していいものじゃないから。」
　一瞬で救われる免罪符などない。誰かを一人倒せば帳消しになるような軽い命など、一つもない。
「だけど、せめて…その答えが出るまで、一緒に考えながら、一緒に戦い続けよ？
　どんなに汚れても僕が…僕が一緒に支えて歩くよ…だって僕は勇太のパートナーだから。」



12

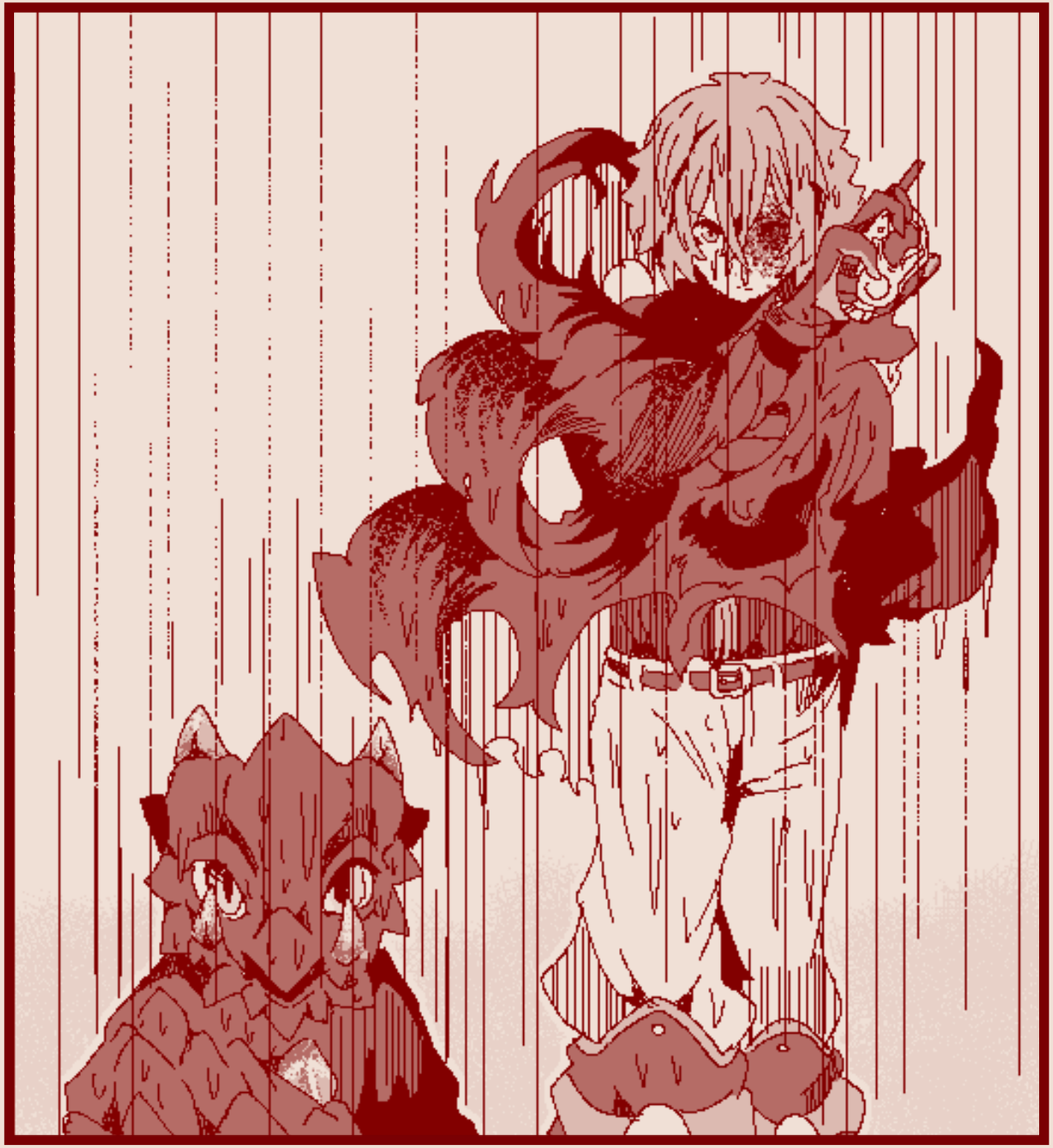
　ヴォーボモンは一歩引き、改めて勇太の目を真っ直ぐに見上げて、短く尋ねた。
「勇太は、どうする？」
　勇太は手の甲で荒っぽく涙を拭い取った。
　頬にはまだヴォーボモンに殴られた熱が残っている。
　胸の奥には、実験体の子供たちを殺めた消えない痛みと、渡辺への激しい怒りがそのまま渦巻いている。
　それでも、勇太はもうそこから目を逸らさなかった。
　地面を踏みしめて立ち上がり、目の前の小さな、けれど誰よりも頼もしい相棒へと向き直った。
「ヴォーボモン。俺と一緒に、戦ってくれるか」
　命令でも、保護でも、依存でもない。一人の人間から一人の相棒への、対等な問いかけだった。
ヴォーボモンは牙を見せて、太陽のように明るく笑った。
「…馬鹿だな勇太。」
　胸を張り、頭頂の炎を大きく揺らしてヴォーボモンは答える。
「僕は、勇太を探しに来た時から、ずっと一緒に戦うつもりだったんだから！」
　勇太は静かに頷き、ヴォーボモンの覚悟を正面から受け止めた。
　自分が先ほど実験体の子供たちを手にかけた罪を、ヴォーボモンに半分背負わせるつもりはなかった。ヴォーボモンもまた、勇太の罪を肩代わりして慰めるようなことはしない。
　勇太には勇太が背負うべき罪と責任があり、ヴォーボモンには叶たちの思いを背負って戦う自分の責任がある。
　二人は、別々の責任をそれぞれの足で抱えたまま、もう一度同じ戦場へと立つことを選んだ。
　並び立った一人と一体の姿を、少し離れた場所から見守っていたフェアリモンが、ふっと静かに口を開いた。
「勇太。最後に一つだけ聞くよ」
　白い風が彼女の薄桃色の髪を揺らす。仮面の下の瞳が、試すように勇太を射抜いた。
「君は…復讐のために、渡辺を殺すの？」
　勇太は逃げずにフェアリモンの視線を受け止めた。
自分の心の中にあるどす黒い感情を、綺麗な言葉で誤魔化そうとはしなかった。
「…俺は、渡辺のことが憎い。あいつがやったことを、絶対に許せないと思ってる」
　はっきりと言葉にしたあと、勇太は一歩前へ踏み出し、曇りのない真っ直ぐな目でフェアリモンを見据えた。

「だけど、それだけじゃない。…俺は、俺の罪から逃げないために、そして光やみんなともう一度会う未来へ進むために…この復讐は何かから逃げるためじゃない…傷つけらた光達のためだけじゃない…俺のためにも…ここで全てに決着を付ける…！」



13

　怒りも憎しみも抱えたまま、それでも復讐の快楽や自己正当化のためではなく、守りたい未来を選び取るために戦う。
　その瞳に宿った揺るぎない光を見て、フェアリモンは満足そうに目元を和らげ、小さく頷いた。
「…ええ。その目なら、もう大丈夫だね。」
　勇太とヴォーボモンが、必要ならば命を奪う覚悟とその責任までを含めて共に戦うことを選び取った、その瞬間だった。
　二人の足元で宙に浮いていた、砕け散った D-3 の破片が高い共鳴音を立てて一斉に震え始めた。
　勇太の全身を巡っていた生体情報が、光の奔流となって足元の空間へ流れ込み、確固たる基盤を形作っていく。
　そこへ、フェアリモンがそっと両手を差し出した。
「ボクの残りの力、二人の繋ぎ目として使って…。
　だけど…その…ひとつだけお願い。」
「？」
「キザったらしくてむかつく奴だったし…仲が良いわけじゃなかったけど…ダスクモンをお願い。
　あいつのスピリットがあそこに宿ってる訳じゃないけど…あいつの誇りのために。」
　フェアリモンの輪郭から解き放たれた風のスピリットの一部が、翡翠色の柔らかな光の帯となって破片の間を縫い、勇太の魂とヴォーボモンの魂を繋ぐ媒介となって編み上げられていく。
「これからも…話せる訳じゃないけど見守ってるよ。」
　そして、そこにヴォーボモンの燃え盛る火炎のデータが力強く接続した。
　今、勇太とヴォーボモンが互いの意思と独立した責任を認め合い、対等な相棒として手を伸ばしたことで、回路は完璧な均衡を結んだ。
　翡翠色の風と、深紅の炎のデータが螺旋を描いて重なり合い、砕けた破片を激しい輝きの中へと包み込んでいく。
　やがて眩い光が収まった時、勇太の右手のひらには、新たに再構築された一つのデジヴァイスが収まっていた。
　しかし、その筐体は新品のように無傷ではなかった。
　表面には、かつて刻まれた深いひび割れや焼け焦げた傷跡が、消えることなく一部そのまま残されている。
　その消えない傷跡こそが、勇太がこれまでに犯した罪と失われた命を決して忘れず、抱えたまま進んでいくことの何よりの証だった。
　勇太がその傷のある新しいデジヴァイスを強く握り締めると、隣に立つヴォーボモンが勇太を見上げた。
「ねえ、勇太。叶の事…。」
　勇太は殴られた左頬にそっと触れ静かに答えた。
「いいや。…俺もヴォーボモンが感じてるどす黒いものを一緒に背負うよ。
　だって…パートナーだから。
　それに叶はきっと生きてる…分かるんだ俺には。」
「…ありがとう。勇太。」



14

白い風の空間が、ガラス細工が砕けるようにピシリと音を立てて崩れ始めた。
静寂の向こう側から、鼓膜を震わせる地鳴りのような轟音と、大気を焼き焦がす熱波の感覚が急速に引き戻されてくる。
次の瞬間、勇太の視界は、崩壊した現実へと引き戻されていた。
停止していた時間が弾けるように動き出す。
目の前には、カオスドラモンの全身の砲門と背部の超巨大砲塔から放たれた、逃げ場のない極大の深紅のレーザーの奔流が、勇太の鼻先数センチのところまで迫っていた。
肩部装甲の上で、渡辺直人が勝利を確信した歪んだ笑みを浮かべる。
だが、その破壊の奔流が勇太の身体を呑み込むより早く…空間そのものを押し割るような灼熱の衝撃が、勇太のすぐ目の前で炸裂した。
「なっ…!?」
渡辺の驚愕の声が響く。
深紅のレーザーの軌道を真っ向から叩き折り、爆煙と火花を散らして弾き返したのは、虚空から飛び出してきた小さな火竜の拳と、その全身から噴き上がった烈火の渦だった。
立ち込める硝煙が、吹き抜ける一陣の風によって晴れていく。
砕けた大理石の瓦礫の上、傷だらけの勇太のすぐ前に、確かな重みと熱を持った肉体を伴って、ヴォーボモンが降り立っていた。
「…ヴォーボモン…。」
勇太が掠れた声でその名を呼ぶ。
ヴォーボモンは振り返らず、巨大なカオスドラモンを真っ直ぐに見据えたまま、尻尾を力強く揺らして言った。
「夢じゃないよ…勇太…！」
勇太は自分の右手を見下ろした。
そこには、心象風景の中で生まれたのと同じ、過去の傷跡を刻んだ新しいデジヴァイスが、確かな質量と熱を持って握り締められている。
右胸の痛みも、左膝の軋みも、右上腕の傷も消えてはいない。
心の奥の罪悪感もそのままだ。それでも、今の勇太の瞳には、迷いも自己憐憫もなかった。
「… 行こう、ヴォーボモン！」
勇太が傷跡の残るデジヴァイスを掲げ、ヴォーボモンと一緒に静かに前へ歩き出した。
その画面に、風と炎の色を帯びた進化の文字が鮮烈に浮かび上がった。
勇太のデジソウルとヴォーボモンの覚悟が一点に重なり、都庁の吹き抜けを埋め尽くすほどの巨大な火柱が噴き上がる。
炎の繭を食い破り、マグマの装甲と巨大な翼を広げて咆哮を上げたのは、灼熱の究極体…ヴォルケニックドラモン。
深紅の機械竜カオスドラモンと、黒炎とマグマを纏うヴォルケニックドラモン。
二体の究極体の威圧感が激突し、崩壊した都庁の空気を激しく震わせる中、勇太は渡辺を真っ直ぐに見据えた。